

ダニエル書6章「獅子の穴からの救い」

1A 優れた霊による働き 1-9

1B 忠実な公務 1-5

2B 王のみへの祈願 6-9

2A 人の悪巧み 10-18

1B いつもと変わらない祈り 10-11

2B 王の憂い 12-18

3A 信頼する者への救い 19-28

1B 無実の証明 19-24

2B 永遠の主権者の証し 25-28

本文

ダニエル書6章を開きましょう。6章において、ついにダニエルの生涯の最後の部分になります。7章からは、ダニエル自身が受けた夢や幻が書かれていて、預言が中心です。6章は、1章からずっと見てきたダニエルの生涯の集大成とも言うべき出来事が書かれています。「獅子の穴からの救い」です。主に仕え、そして異教徒である王に仕えながら、受ける試練があります。しかし、主は必ず、その試練から救い出してくださるということです。

前回私たちは、バビロンが倒れたところまでを読みました。「5:31 メディヤ人ダリヨスが、およそ六十二歳でその国を受け継いだ。」とあります。時は紀元前539年から537年辺りの話です。バビロンからペルシヤに国の権限が移りました。ダリヨスというのは、人の名前ではなく称号と呼ばれています。エジプト王が「パロ」と呼ばれているのと同じです。彼は歴史上で、「ゴブリュアス(Gobryas)」または「グバル(Gubaru)」と言われている人で、クロス王の総督であったと言われています。クロス王がアケメネス朝ペルシヤを始める前に、暫定的にダリヨスが国を担ったそうです。彼は62歳でしたが、数年後に死んだと言われており、それでクロス王が王となりました。

1A 優れた霊による働き 1-9

1B 忠実な公務 1-5

6:1 ダリヨスは、全国に任地を持つ百二十人の太守を任命して国を治めさせるのがよいと思った。
6:2 彼はまた、彼らの上に三人の大臣を置いたが、ダニエルは、そのうちのひとりであった。太守たちはこの三人に報告を出すことにして、王が損害を受けないようにした。

ダリヨスは、どのようにしてこの広大な国を治めるかということについて、120人の太守を任命しました。そして彼と太守たちとの間に大臣を三人置いて、彼が直接太守たちからの報告を受けなく

でもよいようにしました。その中の一人にダニエルがいます。たとえ政権や王朝が変わっても、前政権の公務員を登用することは賢いことです。実務能力があるので、即戦力があります。ダニエルはベルシャツアルが王であった時に既に、エラム州のシュシャン、すなわちペルシヤの首都になるところにいたので、自分のいたところがそのまま首都になりました。

6:3 ときに、ダニエルは、他の大臣や太守よりも、きわだってすぐれていた。彼のうちにすぐれた霊が宿っていたからである。そこで王は、彼を任命して全国を治めさせようと思った。

午前礼拝でお話した通りです。彼には、「すぐれた霊が宿って」いました。神の聖なる霊であります。神は私たちに霊を創ってくださり、その霊が神の御霊によって結ばれている時に、優れた霊となっています。それで、ダニエルをダリヨスは総理大臣にしました。彼は忠実であるという言葉が4節にあります。そしてダリヨスは、神のことをダニエルが「いつも仕えている神」と言います。今はかなり老いているダニエルであります。そこには風格があったことでしょう。王に仕えることについても、そして生涯、天の神に仕えることについてもそこに一貫性、忠実さがありました。誰でも、彼に任せたいという思いが出て来るのでしょうか。イエス様がタラントの喩えで、「良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。(マタイ25:21)」と言ったとおりです。

6:4 大臣や太守たちは、国政についてダニエルを訴える口実を見つけようと努めたが、何の口実も欠点も見つけることができなかった。彼は忠実で、彼には何の怠慢も欠点も見つけれなかったからである。6:5 そこでこの人たちは言った。「私たちは、彼の神の律法について口実を見つけるのでなければ、このダニエルを訴えるどんな口実も見つけれない。」

大臣や太守たちが妬みました。後で、ダニエルのことを彼らは「ユダからの捕虜のひとり」と呼びますが、外国人の身分なのという思いがあったのでしょうか。しかも、奴隷であるのに、ということでもあります。ところで妬む時に、人は何とかして相手の欠点を見つけて、それをあげつらって引き落とそうとします。

そして驚くべきことがここに書いてあります。「何の口実も欠点も見つけることができなかった。」ということです。これは、完全無欠ということではなく、公務において非難されることがないということです。つまり、彼は証しを立てていました。教会の監督にも、同じような特徴が書かれています。「ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。・・また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。(1テモテ 3:2-4,7)」人々を治める務めを担っている

人は、このように外に対して評判が良い人、非難されることがない人、ということです。

そして、「忠実」について考えてみたいと思います。パウロも教会の指導者には「忠実であることが要求されます。」と言いました(1コリント 4:2)。忠実というのは、僕の姿勢です。僕は、主人のことだけに目を留めています。彼の行なうこと、命じられることを一心に待っています。行ないなさいと言われたら、行ないます。何も言われなかったら、待機して待っています。言い換えれば、主人から言われることだけを行なっていけばよいのです。そして主人の言われぬことは、行なわなくてよいのです。そして全てのものは主人が持っていますから、自分のものではありません。主人が全ての責任を負っています。主人が行ないます。これが、全てのキリスト者の姿勢、主に仕える者たちの姿勢です。

そして、「彼の神の律法について口実を見つけるのでなければ、このダニエルを訴えるどんな口実も見つけれない。」とあります。ここも重要です。ダニエルは、異教の国の王に仕えていました。その忠実さは、異邦人である人々も認めざるを得ませんでした。その忠実さは、主への深い献身があるからです。神を恐れるからこそ、王を敬うことができました。主にお仕えするからこそ、王にも仕えることができました。主に仕えるから、世にいる上に立つ人には従えないという二者択一ではなかったのです。イエス・キリストへの深い信頼、献身があればあるから、それで心から異教の主人にも忠実に従えるのだということです。

ところで、イエス様ご自身も同じようにして訴えられました。ユダヤ人のサンヘドリンにおいて、商人がやって来て、あることないこと告訴しましたが、何ら証拠を持ってくることはできませんでした。唯一、イエス様を有罪にすることができたのは、イエス様が、ご自身が神の御子キリストであると言われたことによってです。イエス様が神が父であられる神の子である、そしてキリストの使命を果たしているという、父なる神への従順こそが、訴えの理由となりました。

ですから、生命線は主への礼拝であります。王に従いなさいと勧めているペテロ第一の手紙を、注意深く読んでみます。「2:13-17 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることが、神のみこころだからです。あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」主を恐れ、神の御心に従い、神の命令に縛られる中で、王を敬い、人の立てた制度に従います。

2B 王のみへの祈願 6-9

6:6 それで、この大臣と太守たちは申し合わせて王のもとに来てこう言った。「ダリヨス王。永遠に

生きられますように。6:7 国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、禁令として実施して下さることに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。6:8 王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のようにしてください。」6:9 そこで、ダリヨス王はその禁令の文書に署名した。

次に出て来ますが、ダニエルが日課として、自分の神、エルサレムの神に祈っているのを大臣と太守たちは知っていました。彼は、王の公務という激務の中で、それでも一日に三回、自分の家に戻って祈りを捧げていたのです。それで、彼がそれを行なうこと自体が違反するような法令を、彼らは王の前に提出しました。8 節に、「今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のようにしてください。」とあります。バビロンが、人の像の夢の中で金の頭であり、メディア・ペルシヤが銀の胸と両腕だったことを思い出してください。ネブカデネザルは絶対的な権力を持っていました。自分の語ることがすなわち法律でした。しかしペルシヤにおいては、王が署名するけれども、王であっても法令についてそれを破ることはできない、そして変更できないという拘束力を持つものです。今の法治国家のそれと似たような法体系を持っていたようです。

彼らは、非常に狡猾です。まず、「国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな」と言っていますが、果たして全員がこの法令の内容を知って同意したのか、甚だ疑問です。あるいは、同意していたとしても、ダニエル以外の者たちはほぼ全員が異教徒ですから、王に祈願するということに対して変なことだと思わなかったのでしょう。この法令の真の意図は知る由もありません。もちろんダニエルは関わっておらず、彼の周囲で全て行なったわけです。そして、王は署名しましたが、僅かな隙が狙われました。すなわち、異教徒の王として自分に祈願されるということは、自分に対する忠誠を示すものでした。ネブカデネザルのことを思い出してください。彼が金の像を立てて、それにひれ伏させましたが、それは彼に権力を集中させるためでした。だから王が同意し、署名してしまいました。

2A 人の悪巧み 10-18

1B いつもと変わらない祈り 10-11

6:10 ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。・・彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。・・彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。6:11 すると、この者たちは申し合わせてやって来て、ダニエルが神に祈願し、哀願しているのを見た。

ダニエルは、署名がされたのを知って、それで自分の家で祈っています。これまでダニエルと友人三人の生涯で見てきたように、彼らは王を敬い、王に仕えていましたが、その奉仕と証しの基と

なっている、主に対する献身や礼拝、祈りに対して介入してくるのであれば、主に従います。そして主に従うことによって、神が共にいてくださいます。主が、生ける力を与えてくださいます。ダニエルたちが、野菜だけ食べて十日間過ごしたのに、それでも他の少年たちよりも、顔つきも良かったとあります。友人三人が、金の像にひれ伏すのを拒んだ時、燃える火の炉の中でも主ご自身がおられ、救われました。主にあって人々に、良い行ないによって証しするのですが、その「主にあって」というところに介入してくるのであれば、その時は、ペテロが言った言葉、「人に従うより、神に従うべきです。(使徒 5:29)」であります。

「彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。」とあります。明らかに、ダリヨスではない神、エルサレムにかつてあった神殿に向かって祈っています。これで、法令に抵触することを彼らは確認しました。

ところで、なぜダニエルが、エルサレムに窓を開けて祈っていたのか？ダニエルは、聖書をよく知っていた人物です。彼が生きていた頃から 420 年ぐらい前の聖書の記録にさかのぼります。ソロモンが神殿の建築を終えて、その奉献を行なったときとても大切な祈りを捧げました。列王記第一 8 章にあります。彼は、この神殿の建物に神が宿るのではなく、神は天も、天の天もお入れすることはできないと言っています。ではなぜ神殿を建てたのか？この所に向かっていの祈りを聞いてください、と彼は祈ったのです。モーセがかつて、このようなことを行なえば神は呪われると言ったその具体例をいろいろ出しています。そしてその罪を犯した時に、悔い改めと罪の赦しの願いをこの神殿に向けてささげるとき、祈りを聞いてください、と言っています。列王記第一 8 章 48 節からこう書いてあります。「捕われていった敵国で、心を尽くし、精神を尽くして、あなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた彼らの地、あなたが選ばれたこの町、私が御名のために建てたこの宮のほうに向いて、あなたに祈るなら、あなたの御住まいの所である天で、彼らの祈りと願いを聞き、彼らの言い分を聞き入れ、あなたに対して罪を犯したあなたの民を赦し、あなたにそむいて犯したすべてのそむきの罪を赦し、彼らを捕えていった者たちが、あわれみの心を起こし、彼らをあわれむようにしてください。(48-50 節)」ダニエルは、これを文字通りに行なっていたのです。

ダニエルはまた、9 章によるとエレミヤの預言も読んでいたことが分かっています。その預言にも、祈り求めることによる幸いについて約束されています。七十年が定められていることが書かれています。将来と希望を与える神のご計画があり、それは離散のユダヤ人が帰還することができるものだということです。そこには、「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう。(29:12-13)」とあります。

そして、「いつものように、日に三度、ひざまずき」とあります。朝と夕だけでなく、昼にも祈っていたのでしょ。う。「詩篇 55:17 夕、朝、真昼、私は嘆き、うめく。すると、主は私の声を聞いてくださる。」

とあります。ダニエルの祈りは、かなり切実なものであったような気がします。9章を見ますと、エレミヤの預言、七十年後に帰還できるという預言を彼が見つけたのは、ダリヨスの治世の第一年であることが書かれています。そしてダニエルは、同胞の罪を告白し、エルサレムを憐れんでいただけるよう切に祈っているところが出て来ます。ですから、夕と朝だけでなく、真昼にも祈り、ダニエルの信仰による感謝の思いはますます募っていったのでありましょう。そして、この模様を大臣たちと太守たちは見ていたのです。

2B 王の憂い 12-18

6:12 そこで、彼らは王の前に進み出て、王の禁令について言った。「王よ。今から三十日間、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれるという禁令にあなたは署名されたではありませんか。」王は答えて言った。「取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のように、そのことは確かである。」6:13 そこで、彼らは王に告げて言った。「ユダからの捕虜のひとりダニエルは、王よ、あなたとあなたの署名された禁令とを無視して、日に三度、祈願をささげています。」6:14 このことを聞いて、王は非常に憂え、ダニエルを救おうと決心し、日暮れまで彼を助けようと努めた。6:15 そのとき、あの者たちは申し合わせて王のもとに来て言った。「王よ。王が制定したどんな禁令も法令も、決して変更されることはない、ということが、メディアやペルシヤの法律であることをご承知ください。」

彼らが王の所にやって来た時に、その法令について確認させました。王は、ダニエルを罠に陥れるためにこんな法令に署名をさせたのか、この時点まで気づいていなかったことでしょう。彼は、ダニエルを非常に愛し、尊敬していました。午前礼拝でお話しましたが、ダニエルが優れた霊を持っているということで、神から愛され、人に愛されていたということを挙げました。「1:9 神は宦官の長に、ダニエルを愛しつくしむ心を与えられた。」とありましたね。そこで、まさか自分の手で彼を殺すようなことになるとはと、非常に憂えて、救おうと決心して、夕暮れまで努力していました。法令に抜け穴がないか、調べていたのです。

そして、彼らの妬みは恐ろしいですね。まず、ダニエルのことを、「ユダからの捕虜のひとり」と言って、さげすんでいます。そして彼らは何としてでも、ダニエルの血を流すのに早かったです。「彼らの足は血を流すのに速く(ローマ 3:15)」とあります。

6:16 そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」

ここから、ダニエルがダリヨスに神の証しをしていたことが分かります。「あなたのいつも仕えている神が」と、ダニエルが仕えている神について知っているからです。ダニエルの忠実さを彼は知っていました。彼が仕事に非常に優れているけれども、それは彼の神への深い献身によるもので

あることが分かっていました。すばらしい証しです。そして、ダニエルをこの神に託したのです。この神が、彼を救ってくださるよと言っています。

6:17 一つの石が運ばれて来て、その穴の口に置かれた。王は王自身の印と貴人たちの印でそれを封印し、ダニエルについての処置が変えられないようにした。6:18 こうして王は宮殿に帰り、一晩中断食をして、食事を持って来させなかった。また、眠けも催さなかった。

石を置き、王の印、貴人の印で封印しているのは、たとえ王であってもその法令は変えることのできないものであることを確認するものです。そして、ダニエルのことを非常に心配し、彼の事でかなり苦しんでいます。ここで決してダリヨスが、とても慈悲深い王であると思っはいけません。次に出て来ますが、妻子もろとも獅子の穴に投げ入れるような人です。当時の世界、異教の王たちと変わりなく、無慈悲で横暴な王でありました。しかし、そのダリヨスがいつも食べている食事でもできず、眠気も催しませんでした。つまり、上に立つ人が横暴であっても、それでも私たちは証しを立てることができ、その人の好意を得ることができるということです。

ところで、ここで石を穴の口において、封をするというところで思い出すことがあります。そうです、イエス様の埋葬です。ユダヤ人指導者が、イエスの弟子たちが死体を盗み出すだろうと言ったので、ローマ総督ピラトが、番兵を出して、石に封印をし、番兵が墓の番をしました(マタイ 27:66)。そして実は、ダニエル書 6 章にある話全体が、私たちの主イエス・キリストの復活を指し示していることが分かります。イエス様が父なる神とご自身を一つにしたため、妬みをもった宗教指導者たちがローマに訴えて、それで十字架に付けさせました。そして印を押して墓に収めます。獅子の穴ですが、それは食いちぎられて殺されることは、普通に考えて明らかでした。

3A 信頼する者への救い 19-28

1B 無実の証明 19-24

6:19 王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。6:20 その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

ずっと眠れず、夜が完全に明けるのを待たず、王が獅子の穴にやって来ました。ここも、夜明けにイエス様の墓に行った女たちと似ていますね。そして、おそらくはもうだめだと分かりつつも、僅かな期待をもってダニエルに語りかけました。ここでも、彼がいかにダニエルの証しに影響されているかが分かります。「生ける神のしもべ」そして、「あなたがいつも仕えている神」です。ダリヨスは自分の仕えている神々、偶像は生きていないことを知っていました。ダニエルの神は目に見えないけれども、けれども、生きていることをダニエルの生活を通して目撃していました。

6:21 すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。6:22 私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」6:23 そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

ダニエルは救われました。まず、「神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださった」と言っています。この御使いはもしかしたら、ダニエルの友人三人を燃える火の炉の中ですべてにおられた、神の御子キリストと同じかもしれません。そしてダニエルのことを考えてでしょう、ヘブル書の著者が信仰の人々を列挙していった時に、「ししの口をふさぎ(11:33)」と言っています。

そして、彼は王に罪を犯していないことを話していますね、「獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。」と言っています。王に対して罪を犯していないのだから、この刑罰から救われるはずだ、神はその力を与えられるという信仰です。そうです、罪に対しては死という報酬がありますが、義に対しては命という報酬があります。「忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え(ローマ1:7)」とあります。イエス様は、罪を犯されていないのに十字架に付けられました。そこには、私たちの身代わりとして、その罪のために死なれましたが、しかし主ご自身が罪がないこと、義であることが復活によって証明されたのです。実にダニエルの獅子の穴の救いは、主イエスご自身の復活を表しています。そして、キリストはその義を私たちに神の恵みによってまとわせてくださるので、私たちが主の復活にあって、復活するのです。

そして、「彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。」とあります。ダニエルが神を信頼していました。自分で自分を救うのではなく、自分自身は神の御心を行なうことに専念して、救いは神が行なってくれるという信頼であります。これもまた、主ご自身がゲッセマネの園における祈りで、父なる神を信頼した救いでありました。「ヘブル5:7 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」死からの救いというのは、死ななくて済んだということではなく、たとえ死んでも神が甦らせてくださる救いです。私たちが、キリストの十字架によって罪赦され、そして主が甦られたことを信じる信仰によって、義と認められ、死からの救い、復活の希望が与えられます。

6:24 王が命じたので、ダニエルを訴えた者たちは、その妻子とともに捕えられ、獅子の穴に投げ込まれた。彼らが穴の底に落ちないうちに、獅子は彼らをわがものにして、その骨をことごとくかみ砕いてしまった。

ここで別に、ダニエルが殺されなかったのが、獅子が空腹だったからだ、ということではなかったことが分かります。確実に御使いが止めていたからです。同じようなことが民数記に記されています。カデシュ・バルネアから約束の地に入ることを不信仰によって拒んだイスラエルの民に、主は荒野で 40 年間さまようことになると宣言されました。そうしたら民の中に、「とにかく主が言われた所へ上って行ってみよう。(14:40)」と言う者がいました。モーセは止めましたが、彼らは出て行って、そこにいるアマレク人とカナン人は彼らを追い散らしました。同じアマレク人とカナン人でも、主がおられれば朝飯前なのですが、おられなかったら全く勝つことはできないのです。

そしてこの「訴える」という言葉は、「肉を食いちぎる」というのが直訳です。したがって、ここで王が行なっていることは、妻子までも投げ入れているので残酷極まりなく、無慈悲であります。それでも一つの神の原則を表しています。「自分が行なったことに等しい、報いを受ける」ということです。「詩篇 7:14-16 見よ。彼は悪意を宿し、害毒をはらみ、偽りを生む。彼は穴を掘って、それを深くし、おのれの作った穴に落ち込む。その害毒は、おのれのかしらに戻り、その暴虐は、おのれの脳天に下る。」

2B 永遠の主権者の証し 25-28

6:25 そのとき、ダリヨス王は、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに次のように書き送った。「あなたがたに平安が豊かにあるように。6:26 私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。6:27 この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

ダニエル書 4 章における、ネブカデネザルによる手紙と同じ内容をダリヨスも話しています。つまり、初めに、「あなたがたに平安が豊かにあるように。」から挨拶しています。まるで使徒たちの手紙の始まりのようです。そして、「ダニエルの神の前に震え、おののけ」と命令しています。ダリヨスがネブカデネザルのように、自分自身が神をほめたたえ、恐れていませんが、けれども、ダニエルの神は確実に生きているという証言を立てています。そして、人間の国々は興って、倒れるけれども、神の御国は永遠に続きます。私たちは、その神の国の中に入れられているのです。だから、この世界がどのように変わろうとも、私たちの証しは変わらず、確実に残ります。それから、神が人を救われる方であり、また徴と奇跡を行われる方であることを、称賛しています。

6:28 このダニエルは、ダリヨスの治世とペルシヤ人クロスの治世に栄えた。

先ほど話しましたように、ダリヨスの治世は暫定統治であり、彼がすぐに死んだと言われていますが、クロス王がペルシヤの初代王となり統治を始めました。その彼が、主によって霊が奮い立ち、イスラエルの神、主の御名によって、ユダにある宮を再建するように布告を出したのです。そして、

再建のための資金はペルシヤの国庫から予算振り分けによって行ないました。

その時、おそらく紀元 636 年ですが、その時までダニエルはいたのです。紀元前 605 年から少なくとも 636 年辺りまで彼はいました。エレミヤが、神の怒りの器としてネブカデネザルを用いと言われて、七十年の期間が定められているということでありましたが、神はユダヤ人がエルサレムにいない期間、確実に生きておられることを、異教の王たちに働きかけて証しされていたのです。その中で、主が自分をこの地に置いておられるのだと、召命を受けて、その召命に忠実に応えていきました。主が、皆さんをもその置かれているところに遣わしておられます。そして、そこで主に忠実に仕えます。そして、自分では知らない、気づかない、想定していないことかもしれないけれども、それでも主は働いておられます。そのことを信じるのです。